

DDAを導入して

－電子資源管理部門での取り組みや変化－

こがりえこ
古賀理恵子

(日吉メディアセンター主任)

ふじもと ゆうこ
藤本 優子

(メディアセンター本部)

1 導入の経緯

慶應義塾大学メディアセンターは約500万冊に及ぶ蔵書に加え、学内外から利用可能な電子資料を数多く提供している。電子ブックの提供はかねてより、年間購読、コレクション買切といった形で行ってきたが、2016年4月、新たにMediated Demand Driven Acquisition (以下「DDA」とする)によるサービスを開始した。電子資源管理担当の視点から、DDA導入にあたっての業務上の変更点や現在の取り組みについて述べたい。

Demand Driven Acquisitionとは「需要駆動型購入方式」等と訳されるが、図書館員が選書を行う従来型の方式とは異なり、利用者が必要とする資料を選び、その需要を図書館に知らせ、図書館員が調整した上で (Mediated) 購入を決めるというモデルである。

導入の目的は変化する環境に対応し、活きた洋書のコレクションを利用者に迅速に提供することである。慢性的な書架スペース不足の解消が望めない中でも、日々進歩していく学際的な研究をサポートできるよう、より幅広い分野の資料を収集することは図書館の任務である。さらに慶應義塾が掲げる国際化の方針に従い、学部レベルでも全カリキュラムを英語で行うコースの設置が進められている。2011年度に環境情報学部、2015年度に総合政策学部にGIGA (Global Information and Governance Academic) Programが設置され、2016年度からは経済学部にPEARL (Programme in Economics for Alliances, Research and Leadership) が開設された。これまで洋書は研究者や修士課程以上の学生を対象とした専門性の高い資料を中心に購入されてきたが、GIGAを擁する湘南藤沢キャンパスでは学部生向けにも洋書、特に基礎的な資料や教養書を充実させる必要が生じ、電子ブックの契約の見直しが急務となった。

そこで、多言語の幅広い分野を網羅し、学習及び研究用のタイトルを取りそろえるProQuest社の電子ブックサービスを開始することとなった。約12万冊の年間購読パッケージであるebrary Academic Complete with DASH!¹⁾と約70万冊を取り揃え、DDAのシステムを有しているEbook Centralである。

Ebook Central DDAでは利用者は興味のあるタイトルにアクセスすると本文を5分間試読可能で、それ以上読みたい場合は、データベース上にアカウントを作成し、購入リクエストを出す。リクエストした利用者が所属しているキャンパスの担当者はそれぞれの選書方針等から購入の可否を決める、という流れである。購入を決めたタイトルはEbook Centralの管理者画面でアクティベート (アクセス権の購入) ができ、即時に全文へのアクセスが可能になる。リクエストを送った利用者に対しては、アクティベート時に利用可能通知が、購入不採用についてはメッセージを入れてRejectボタンを押すことで、謝絶のメールが送信される。料金は購入に応じ決まる。管理者画面上でFund Codeを書き込むことで振り分けが可能のため、慶應では月締めで予算別に支払いを行っている。

利用者はタイトルをEbook Centralのサイト上で検索することが可能だが、それよりも本学の蔵書検索システムKOSMOS (ExLibris社のPrimoを採用し、冊子・電子の統合検索を可能にしている) で検索可能にしたいという強い要望が湘南藤沢メディアセンターより出された。検討の結果収録タイトルが、70万件と膨大で、かつ四半期ごとに追加や入れ替えが行われる商品なので、安定的にサービスしていくためメタデータのメンテナンスは自力ではなく、流通するナレッジベース (以下「KB」とする) を利用することが現実的であると判断した。そのため、ディスカバリーサービスのセントラルインデックス

特集 電子ブック：試読型選書システム (DDA) を導入して

「Primo Central Index」²⁾を活用することとなった。

和書の電子ブックについては、2010年に開始した電子学術書利用実験プロジェクト以来、コンテンツ拡充とサービス提供を模索している。³⁾ 専用ソフト型 (BookLooper) は電子学術書利用実験プロジェクトで実験・検証まで行ったが、コンテンツの量が少なくディスカバリーサービスとの連携も望めないため、導入・サービス提供には至らなかった。その後、冊子との組合せで購入する「ハイブリッド方式」を導入したが、アクセスした回数による試読型選書を試みるため、Maruzen eBook Libraryについても同様にPrimo Central IndexによるKOSMOSでの検索サービスを開始した。

従来KOSMOSには全文が冊子または電子で利用できる契約済み資料のみが収録されていたが、試読タイトルへのアクセスを可能にするために、未契約タイトルのデータを検索対象にするという政策的にも大きな変更があった。

2 導入のメリット・変化

KOSMOSのコンテンツ搭載方針が大きく変わったことに加え、ebraryとEbook Centralは、商品自体が拡大・統合の過渡期にあったため、システム変更やURL変更にKBの対応が遅れ、KOSMOSから全文までのアクセスがスムーズにできないことで混乱が生じた。そもそもDDAが利用者に受け入れられるだろうか、という懸念も大きかった。しかし、ふたを開けてみると、利用は堅調に伸び、2016年度には1,300件、2017年度には1,800件に及ぶリクエストが寄せられ、約2,700タイトルを購入するに至った。はじめは湘南藤沢キャンパスを中心に管理していたが、利用は全キャンパスに及び、学部生から研究者まで、大きく広がったため、管理体制の効率化に向け2年目からはメディアセンター本部電子資源担当による全学的規模での管理に切り替えた。

DDA導入の最大のメリットはスピードである。管理者画面でのアクティベート操作によって利用を開始できるため、従来選書からサービス開始まで3週間程度かかっていたが、DDAでは平均5日以内に提供できるようになった。

利用統計を見ると、大学出版局や学術出版社のタイトルを中心に、出版年が比較的新しいもの、中でも授業の参考文献や教材として指定されたタイトル

はとてもよく利用されていることがわかった。また、ダウンロード数、印刷ページ数の他、セッション数、閲覧ページ数等様々なアクセスログがとれるので、リクエストには至らない潜在的需要を知ることができ、それが図書館員の選書につながる側面もあった。購入したタイトルの96%が1回以上利用され、1冊あたりのセッション数は平均5.5回であったことから、利用者の需要にあった選書が効率的にできていることがわかる。

本学はこれまである程度収録タイトル数の多い電子ブックコレクションを購入してきた。価格が高額になると支払い手続きが複雑になり、収録数が多いとメタデータやアクセス確認も煩雑になるため電子資源担当業務にかかる負荷は非常に高かった。また予算執行状況や為替動向を見て年度末まで発注を見送るケースもあった。DDAの導入により選書のツールとしてKOSMOSが利用され、冊子のように一年を通してTitle by title (以下「TbT」とする)で購入されるようになった。購入希望が活性化し、電子ブックだけでなく、冊子についても相乗的に増えたといった変化がみられるキャンパスも多かった。

3 業務側の対応

前述の通り、KOSMOSには未購入分も含めた70万冊以上の電子ブックを搭載することになった。多くの電子ブックのタイトルが利用者の目に触れ、ニーズを拾うことができるようになった一方で、図書館スタッフは資料購入時の重複調査にこれまでと同様の使い方ではKOSMOSを利用できなくなった。購入分のみ搭載していたときは所蔵の有無を一目で確認できていたが、現在は試読分も購入分も区別なく表示されるため一つ一つ中身を開いて確認しない限り、該当の電子ブックが試読なのか購入したものは判別できない。そこで、業務用に簡易な書誌データとその状況 (発注日、利用開始日、KOSMOS搭載日等) を登録・検索できる電子ブック発注管理データベース (以下「発注管理DB」とする) を新たに構築した。それまではTbTの購入管理をシステム的には行っておらず、2011年度以降Excelに年度ごとの購入分を記録していた。そのExcelで管理していたデータを発注管理DBに登録することにより、重複調査に利用できるようにした。それでも現状ではこれまで購入したタイトルのすべてを検索するこ

とはできないため、コレクション単位で販売されているものや2011年度以前のもの、冊子体の有無についてはKOSMOSも併せて検索する必要がある。

増加するリクエストに対応し、購入の仕方も工夫がなされている。Ebook Centralで選択可能なアクセス権の購入形態は複数あるが、導入した当初は1user（同時アクセス数1）での購入が多かった。購入希望の理由やその後の利用のされ方を考慮した買い方を検討し、タイトルによってNon-Linear（同時アクセス数は無制限だが、1年間にアクセスできる数が決まっている）やUnlimited（同時アクセス数無制限）も取り入れ、1userで購入したものを3users（同時アクセス数3）に増やすというように時と場合に応じた買い方をしている。

購入方法の工夫もあり、DDAに対する利用者の反応は非常に良い。本学のEbook Central DDAでの購入数（額）の伸びは他の機関と比べて顕著に大きく、ProQuest本社の責任者が来訪するほどであった。その際には日本の状況を理解してもらうための話し合いを行い、情報を共有した。その後も継続して同社に要望を伝えたり、日常的にデータの修正を依頼したり、より使いやすいものとなるようスタッフを含めた利用者の声を届けている。さらに同社が開催するイベントで発表を行ったり、ブロッシャーやWebサイトに掲載するCase Study⁴⁾を寄稿した

りして、慶應での導入について学外への情報発信も行った。

4 DDAの課題

電子ブックは視認性が高まることで利用が拡大するが、それだけにアクセスに必要なメタデータの精度は重要である。目録データの記述やリンクすべきタイトルが間違っているとといった初歩的なミスはもとより、ディスカバリーサービスのKBとリンクリゾルバ（メタデータから本文へナビゲートするためのツール）のKBの間に齟齬があると、KOSMOSで目当てのタイトルが見つかって、リンク切れで全文にアクセスできなくなってしまうこともある。

海外の電子ブックはコンテンツが豊富であるが、日本語のコンテンツはまだ少ない。特に大学での利用が望まれる新刊の学術書が少なく、出版社やベンダーにコンテンツの充実を要望している。教科書や指定図書は冊子の複本を用意するだけでは足りず、電子ブックの同時アクセスも少ない状況では利用に応えられない。一時的に同時アクセス数を増やすモデルや、新しい数多くのコンテンツを読むためのサブスクリプションモデル構築も望まれる。

また、KB作成会社が専ら海外企業であるため、日本語の記述内容を判断して目録データが作られることは期待できない。日本の出版社がKBベンダー

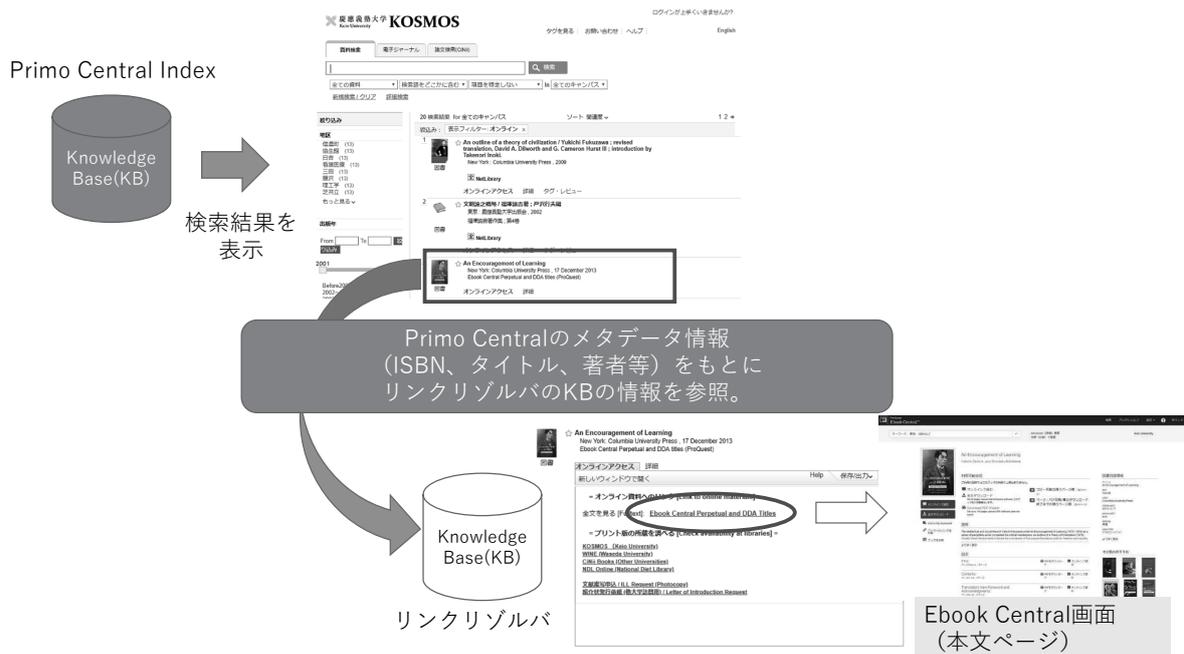


図1 本文へのリンクの仕組み

特集 電子ブック：試読型選書システム (DDA) を導入して

に提供する目録はグローバルスタンダードなフォーマットで作成されていないことで、副題やシリーズ名であることが認識されず、KBに反映されなかったため副題中の語にあたる授業名で検索すると冊子だけがヒットし電子ブックが漏れてしまったり、多巻ものにセットISBNのみが振られているために、1巻目の情報だけがKBに登録され2巻目以降の情報が欠落するといった事例が頻発しており、国内の出版社・ベンダーに対し、メタデータの整備を併せて要求している。更に、提供タイトルの検索・閲覧のみができる利用者向けプラットフォームではなく、利用ログが取れる管理者画面の提供や、DDA機能を持つ商品の構築についても働きかけている。

5 今後に向けて

2017年度に新しい図書館システム (Alma) の電子資源管理部分を一部導入した。これにより、ひとつのシステム内で選書のための重複調査から発注、アクティベート、支払までスタッフが効率よく業務を行い、その結果利用者へ迅速に必要な資料とサービスを提供できるようになることを目指している。

重複調査を発注管理DBやKOSMOSといった複数のシステムを使うことなく行えるよう、第一段階として発注管理DBで管理していたタイトルをAlmaへ遡及入力している。また、さらに現在は代理店にメールで発注したり、管理者画面からアクティベートを行ったりしているが、コンテンツによってはAlmaのKBを介してアクティベートができるようになる可能性がある。支払も電子的に行うことを検討しており、版元や代理店と調整を行っている。手入力していた内容をデータでやり取りすることにより業務負荷を減らし、効率化につなげたい。そのため、現在の複雑な予算コードを整理し、システム上で無理なく管理できるようにしなくてはならない。各キャンパスのテクニカルサービス担当と連携して作業を進めているところである。コレクション構築では、DDAにより利用者のニーズに合ったタイムリーな選書が可能になった。引き続きワーキングコレクションの維持に努めていくとともに、教科書や参考書の提供等の可能性も含めて検討していく必要があるだろう。

和書の電子ブックも課題はあるが、一方で進展もみられる。Maruzen eBook Libraryでは、これまで

でアクセスした回数により選書と購入を行ってきたが、2017年12月より5分間の試読後にリクエスト画面が表示されるようになった。管理者画面の開発も進んでおり、利用者からのリクエストが一覧でき、アクティベートが手元でできるようにすることを目標としている。2018年度下半期には、DDAシステム試行版が稼働することを期待している。

電子ブックの発注から利用までの一連の流れにおいて、KBの精度や更新頻度の向上は必要不可欠である。電子ブックのプラットフォームにコンテンツが搭載された後すぐに、検索に耐えうる書誌データとリンクリゾルバがそれぞれのKBに作成されることがすべての始まりとなる。そして、ディスカバリーサービスとリンクリゾルバのKBの双方が正確かつアップデートが早ければ、利用者を正しくコンテンツに導くことができる。KBの改善は、研究・教育支援につながるものであり、また本学の業務だけではなく、同じKBを使用している他機関にも有益であり、これからも継続して要望を出していきたい。

注・参考文献

- 1) Academic Centralはebraryプラットフォーム上でサービスを開始した(ebrary Academic Complete with DASH!)が、後に買収した電子書籍サービスEBLと統合し、プラットフォームEbook Centralに移行、Academic Completeとして提供されることとなった。Academic Completeは新刊を除く12万冊以上(2016年4月時点)が同時アクセス無制限で提供されるパッケージである。
- 2) 稲木竜. 慶應義塾大学における電子書籍の取り組み ―ディスカバリーサービスの活用事例―. 情報の科学と技術. 2017, vol.67, no.1, p.14-18.
- 3) 浅尾干夏子, 藤本優子, 岡本聖. 電子学術書利用実験プロジェクト利用実験班報告: 第三期利用実験報告を中心に. MediaNet. 2012, no.19, p.28-32.
- 4) "How Japan's Oldest Private University Evolved its Collection". ProQuest Blog 2018.
https://www.proquest.com/blog/pqblog/2018/How-Japans-Oldest-Private-University-Evolved-its-Collection.html?WT.mc_id=ab0a263a4b2bc4feab2511642fc490c,
(accessed 2018-08-05).